



両角 晴香 第二回

8月は、40度の熱が下がらず困りました。解熱剤を飲めば一時的に平熱に戻るものの、油断すればまた40度。さすがにコロナ感染を疑うもPCR検査は陰性。医師は腎盂腎炎を疑い、抗生剤を飲んで2週間で完治しました。その間、隔週で通っている趣味はおあずけとなり、ああ、残念と思っていたが、趣味を運営するスタッフ数名が新型コロナに感染していることがわかり、ゾッと背筋が凍りました。腎疾患患者がコロナに感染すると重症化する可能性があるからです。夫からもらった腎臓を守らなくてはならないわたしにとっては死活問題。腎盂腎炎になってかえって救われたのかな。スタッフさんの早期回復を祈ります。

夫の腎臓と、笑うわたし
P356~



野中 浩一 第二回

15年前に島根県に移住し、以来、フリースクールの運営をしています。近年は中

学校にスクールカウンセラーとして入らせてもらったり、評議員として養護学校に関わらせてもらったりもしています。

島根の里山での暮らしは夏真っ盛りです。夜、家の前に時折カミキリムシやクワガタムシが遊びに来ることがあります。今年はカブトムシなどさらに色々な虫を呼び込もうと、バナナを焼酎に漬け込み、それを日光で発酵させました。ところが虫を寄せる前にカラスが集まり食べ散らかす事態に。何事もトライ&エラーですね。

「島根の中山間地から Work as Life」
P350~

小幡知史

初めまして。小幡知史・渡辺修宏・二階堂哲と申します。今回は2回にわたり、渡辺さんよりご自身の半生と、渡辺さんの対人援助実践をレポートした一冊についてご紹介させていただきます。

今回は小幡より、簡単ながらも自分の対人援助実践に関する振り返りと、自身が陥っていたジレンマを打開するヒントをくれた一冊をご紹介します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

対人援助実践をレポートする
この一冊
p346~

米津達也

立秋を過ぎたあたりから天気が崩れはじめ、豪雨とコロナに悩まされる8月。晴れ間を狙って原稿の構成を考えようとトレイルに入ると、川がルートを阻み、走るたびに蜘蛛の巣を絡めとり、倒れた大木が行く手を塞ぎ、蛇がのっそりルート上に横たわる。こちらがルートだと思っているが、あちらにすれば優先は違う。お互い、待ちに待った晴れ間。対等な立場で譲り合うのが自然だ。足元には力尽きた蟬の亡骸が多く、過行く夏を思う。

川下の風景
p339~

高井裕二

歯磨きをしている時、腰に激痛が走って動けなくなりました。整形外科を受診したところ、腰椎の椎間板ヘルニアとの診断でした。下半身に痺れが出てきているもの

の、仕事は休まずに続けられています。高齢者の相談員をしていた時に「痺れ」という言葉を高齢者からよく聞きましたが、こんなに歩きにくくなるのかと体感しています。皆さまもお身体、ご自愛ください。

福祉教育への挑戦
P344~

本間 毅

退院支援研究会の2018年度年次大会において、「物語医療」を我が国に導入された立命館大学総合心理学部の特別招聘教授(当時)の斎藤清二先生に『医療における多職種協働と物語能力』という特別講演をお願いしたことがあります。「多職種協働が重要であることは論を俟たないが、そのためには物語を読み取る力量(リタ・シャロン)を向上させる必要がある」という趣旨の講演で、その後も1時間以上にわたる活発な意見交換がなされました。以前、他の研究会でその斎藤先生が『ナラティブ臨床社会学』など多数の著作がある東京学芸大学の野口裕二先生とともに、「医療系の物語はナラティブ、人文系はナラティブと表記すべきか」という質問を受けて顔を見合わせ苦笑されていたことがありました。その苦笑には、「ブとヴはさておいて、ひとつひとつの物語の意味を丁寧に感じ取って欲しい」という気持ちが込められていたような気がします。研究者どころか臨床家にも意味の全体より記述の端々を気にする方がいますが、リタ・シャロンが「物語能力を向上させよ」と強調する所以でしょう。

近代物語文学の最高傑作『遠野物語』の冒頭で、作者の柳田國男は話し上手ではないが誠実な友が語る遠野に伝わる物語を書き記すにあたり、「一言一句まで加減せず、(聞きたるままではなく)感じたままを記す」と誓いました。「多様性や多義性」の名の下に、好き勝手な物語の解釈がなされては何人をも戦慄せしめることはできません。先が見えないコロナ禍においても、専門家があげる科学的根拠と最前線におかれた人々の一言一句に心して耳を傾けるべきでしょう。

「幾度となく会い、
語りあうことの意味」
P329~

河野暁子

忙しすぎていたためか、夏風邪を引きました。30年ぶりの高熱に、自分でも驚きました。幸い、すぐに熱は下がったのですが、世の中は新型コロナウイルスに警戒中なので、念のため、しばらくは家の中で過ごすことにしました。

私の家は、いつもふらりと人がやってきます。友人たちにも一応気をつけてもらった方がよいかと思い、事情を連絡しておきました。当分家には誰も来ないはずだと、のんびんだらりとしていたところ、スポーツドリンクに季節の野菜や果物、ホヤなどが、次々と届けられました。

体調がよくない時は、人のやさしさが身に沁みます。差別や偏見など、殺伐としたニュースを耳にしますが、身近なところでは、人が人を労わることが当たり前に行われていました。こんな地域を、少し自慢してみたくくなりました。

この世界で生きるあなたへ

～国境なき医師団の活動～

P336～

土元 哲平

「移動」とキャリアとの関係を考えています。海外に滞在したり、初めて一人暮らしをするというように、馴染みだった場所から移動すると、新たに自分自身の住んでいた地域や文化を改めて認識、理解できる場合があります。よく「人生は旅である」と言いますが、実際に旅をしていると、自分自身に対して、様々な気づきがあると思います。最近はやや出歩きづらくなりましたが、コロナ禍が収まったらどこかにまた旅行してみたいものです。数ヶ月前、旅行代理店が開催しているオンライン海外旅行に行きましたが、オンラインで旅をするサービスも、今後増えていくのかもしれませんね。

キャリアと文化の心理学

P278～

安發明子

今回はフランスの児童福祉の近年の法改正について書いた。2021年も今年の改正点を政府が発表すると現場では蜂の巣をつついたかのような議論になり、大臣のツイッターに日々反応し、様々な機関が報

告書を発表する日には先を争って感想や意見を言い合う。フランス革命以来「国民が困難を抱えているとしたらそれは国のせい」という精神の社会なので誰もが主張し騒々しい。コミュニケーションが活発にされていること、蠢くだけではなく流れが起きることが魅力である。2007年の法改正で「虐待」という言葉をなくし「心配」をもとにケアをスタートするようになった。問題は根深くくら予防しても追いついてはいないが、きめ細やかに状況に合わせており、また人を支えようという意図が見える仕組みであると思う。「現状を良くしたい」という現場の専門職たちの叫びが透けて見える。児童保護大臣が置かれるようになってからはツイッターで日々大臣の視察先や交わされた議論、当事者や関係者からの意見や大臣の返しを見たり、テレビで大臣が施設にいる若者や出身者と討論を繰り広げたり、流れがより目に見えるようになり興奮している。

子どもの声が尊重される社会になることを願いながら書いた。

(写真はテレビで大臣と施設内暴力を受けた出身者であり児童保護国家委員会メンバーの討論)



フランスのソーシャルワーク

P282～

玉村 文

子どもが2人になった我が家では、ベビーベットやバウンサーが大活躍。上の子がドタドタ走って踏まないように、下の子を避難させるのに使っています。そんなベビーグッズは、ママ友たちからお古をちよだいしたりお借りしたりと、新しく購入したものはほぼありません。わたしも妊娠中に着用していたマタニティグッズはすべて友達に譲りました。そうやって、一時期しか使わないものはママ友と回っていきます。フリマアプリなどでも揃えることはできますが、ママ友の子どもも使ったものを使わせてもらうことで愛着も芽生えます。さて、子ども2人になった我が家は、毎日バタバタです。この記事を書いているお盆も帰省が叶わず、毎日何をするのかどうやって

遊んでもらうのか試行錯誤。子どものエネルギーって本当にすごい、親の方がヘトヘトになりました。そんな今回のテーマは、子どもと感染症、親も疲弊。

応援 母ちゃん！

P270～

川畑 隆

山本昭二郎先生が亡くなりました。93歳でした。少年鑑別所を経て大阪市中央児童相談所の判定係長、大阪市立児童院長、そして神戸松蔭女子学院大学の先生、森田療法の専門病院「三聖病院」でも患者さんと面接されていました。

私が大学3年のときの「臨床心理学実習」の非常勤講師で、ロールシャッハテストを教えてくださいました。それ以降ずっとおつきあいさせていただき、私にとって恩師でした。桃山台のお宅には先生を慕う者たちが年に1度は集まりました。葬儀会場には趣味の写真が飾られていました。

佐藤豪(すぐる)君が病気で亡くなりました。66歳でした。私の大学の同級生で当時は一緒によく呑みました。彼が札幌医科大学の助手時代には、根室に向かう前夜、部屋に泊めてもらいました。おいしいラムのシャブシャブもご馳走してくれました。その後は札幌から同志社大学に戻り、心理学部長をやりました。結婚生活は10年だけでしたが、最期まで奥様と幸せに暮らしたようです。私は10年以上会っていませんでした。誕生日が私と1日違いだったことを、告別式で思い出しました。

「かけだ詩」

p260～

天川 浩

ホームレスを軽んじたという人がいるというゴシップニュースに目が留まった。彼にホームレスを差別させた何かがあるにそこにはあったのだろう。自分と違うことはいけないことか？人は自分と違うことに違和感を感じる生き物である。自分の色、形、姿、パーツの良し悪し、ライフスタイル、様々なことを他者と比較し、同じであるか、あるいは、優れているか、を確認し、そこに安心感を感じる。その安心感は相対的なものであり、必ずしも恒久的な安心を与えるものではない。時々、人は、なんと綿菓子よりも頼りなく儂いことに、寄りすがって泡沫

の安心感を得ているのかと思う。その安心感を得るために人を欺いたり、他者を扇動したり、いわれなき差別を生み出したりしてまで、自分の安心感を獲得し、それを長期に安全なものにしようと企むもので歴史には存在した。そもそも安心感とは何か？どこから来るのか？

8月になるとこういった思いに囚われる時がある、自分も、その中の一人だとわかっているのに…。これからの時代、何が起こるかかわからない、今まで天動説のように信じてきた固定概念も崩れ去る時、人はどんなことに安心を見出しているのか？それを考えたら夜も眠れなくなっちゃう、なんて三球照代のことをほとんど知らない世代が読む雑誌に載せちゃったりしちゃったりしている訳です。



それと、今回から文章が2段組みに復活していますが、今年の4月にPCがクラッシュしてWordがまともに使えなくなって、急遽グーグルドキュメントを利用しているのですが、今月ようやく表示形式を設定する方法がわかったので、書式が3号ぶりに復活した次第ですというのは内緒でお願いします。

ブルーグレーの肖像
P265~

原田 希

この夏は、本州と変わらない連日猛暑がこたえました。ツナギにビニール手袋に帽子、魚河岸さんと同じロングエプロン。お湯をじゃんじゃん使う湿度ムンムンな搾乳現場に、討ち死ぬ気分が入っていました。牛さんたちも肩で息をし、相当にこたえたと思うのですが、一頭も脱落せずにお盆を過ぎれば秋の気配。ホッとした頃に頑張っていた疲れは出るものです。牛さんも数頭、おつかれ症状が出ました。皆さんもご自愛ください。体力維持には旬のものを食べるのが一番ですね。これからは新米、カボチャ、鮭、イクラ、百合根も楽しみです。

原田牧場 Note
p257~

工藤 芳幸

7月末に日本コミュニケーション障害学会の学術講演会（新潟開催）に参加しました。今回は後期課程で取り組んでいるインタビュー研究についての発表と、言語発達研究のセクションの座長をさせていただきました。久しぶりの「対面」開催で、遠方への新幹線移動ということもあって楽しみにしていたのですが、ギリギリまで仕事が終わらず、行きの新幹線で準備開始。ギリギリ発表に間に合わせるという余裕のないスケジュールでしたが、いくつかコメントももらって、なかなか顔を合わせることができなかった友人や知人と再会できました。その中に学生時代にお世話になったA先生もいました。

私は東京で大学生をしていた頃、自閉症などの障害がある子どもたちが通う学童保育施設でアルバイトをしていたのですが、障害がある子どものコミュニケーション発達について学びたいと思い、発達心理学の先生から埼玉のINREAL（Inter Reactive Learning）研究会を紹介してもらいました。そこが私の子どもの発達に関わる援助の学び始めの場となりました。そこで出会ったのがA先生です。当時は医療機関のSTで現在はST養成校の教員をされています。研究会に足しげく通ったわけではないものの、A先生が非常勤で教えていた某大学の大人と子どものコミュニケーション分析の授業にも参加させてもらうこともできて、今の私の仕事に向かう「基礎の基礎」となりました。その後20年余り。ときどき研修会や学会で少しことばを交わす程度でしたが、その時の私の迷いに対して示唆を与えてくれる先生でした。

今回私が座長を務めたセクションではA先生が教えた若いSTが発表してくれました。会場でA先生に声をかけると、「これからは君たちがやっていく番ということだよ」とおっしゃいました。A先生と出会ったときに私は二十歳。A先生は「もうすぐ定年」とか。でも確かにそんな年齢です。発表していたのは20代の大学や大学院を出たばかりなので、よく考えてみると私が

A先生と出会ったときにA先生は今の私の年齢に近かったのかも知れません。目の前にあることをとにかくこなして毎日過ぎていくうちに、いつの間にか教え導いてくれていた人たちが一線から退いていく当たり前の現実。今更かも知れませんが、自分はA先生のように後輩に何かを提供する役割も果たせるのか…もう少し襟を正して生きていけないといけないうかな…と思ったコロナ禍の学会でした。

みちくさ言語療法
休載

高名祐美

2021年6月4日、父は88歳になった。6月4日は私の結婚記念日でもある。結婚33年目と父の米寿を祝いたいと思った。

父は3年前に庭で転倒し、起きあがれずに長時間外にいたために熱中症になり入院した。元気に過ごしていた父だが、それ以後めっきり体力も気力も低下し、一日中家で過ごすようになった。長年の喫煙からくる肺気腫で、呼吸困難もひどくなった。大好きなお酒も、量はめっきり減った。食事はほとんど食べなくなり、やせが目立つようになった。少し動く息切れがひどく、咳こむことも多い。感染症には厳重注意が必要ならだになってしまった。

本来なら米寿を盛大に祝ってやりたいところだが、父の体の状態とコロナ禍を考えたら大きなイベントをすることははばかられた。考えたあげく、父に空気清浄機をプレゼントし、昼食と一緒に食べることにした。父の大好きなお寿司を用意したが、食べたのはわずか3貫。それにデザートにイチゴを少し。ひ孫を抱っこし、一緒に写真をとった。年をとったなとつくづく思った。

運転免許を返上した父の病院受診に付き添うのは私の仕事になった。14年前私が足の手術で3か月金沢の病院に入院したとき。1日おきに金沢まで面会に来てくれた父。同じだけのことを父にしていきたいと思うこの頃である。

MSWという仕事
P253~

岡田隆介

「これまでの日々」の延長上に「これから

先”を描く帯ドラマのようなライフスタイル」と、「達成感と心地よさだけで“いまここ”を切り取る写真集のようなライフスタイル」があるとして、どっちが好み？と自分に問うてみた。

断然後者！と即答した。
エア絵本
ビジュアル系子ども・家族の理解と支援
P50～

一宮 茂子

【緊急事態宣言中の楽しみ】

新型コロナウイルスの感染拡大はいつまで続くのだろうか？ 京都府は8月20日から9月12日まで緊急事態宣言。閉塞感漂うなかでオリンピックもパラリンピックも開催して観られたけれど、毎日の楽しみはなんと言っても MLB のリアル二刀流大谷翔平選手の活躍。今年度はショーヘイルールと呼ばれた制限を全部取っ払って、投げた日の前後の休みもなく、毎日打者として試合に出場。本年8月25日現在で両リーグトップの本塁打40本。投げては8勝目。走っては盗塁19個。純粋に野球を楽しんでいるのがTV画面越しでもよくわかります。身長193cm、体重102kg。全身鍛え上げられた筋肉。小顔で人格者である彼は、映画俳優やモデル顔負けのイケメン。年齢、性別、国籍問わず、モテモテの人気者。そのうえに「カワイイ」のです。試合中でも敵チームの選手は彼に興味津々で、塁上で彼に話しかけ、彼も応じて話している。TVカメラで抜かれているこれらのやり取りは、いつも笑顔。毎日観るたびに元気や勇気、やる気もらっています。日本人として誇りに思っています。

生体肝移植ドナーをめぐる物語
P241～

松岡 園子

昨年ごろから「ヤングケアラー」の理解を深める集まりで、10代からの経験をお話させていただくことが増えてきました。行かせていただくたびに、このテーマに関する関心が以前よりも高まってきていると感じます。

そこではサポートの必要な若者を、どのように見つけていけばよいのかというご質問を受けることが多いです。私の場合は、この人は信頼できると感じた大人の人に

は、自分が困っていることや助けてもらいたいことを話していました。誰にでも話すわけではなく、子どもの目線で話してくれる人、味方になってくれそうな人を探していたような気がします。それは主に、日常の他愛のない会話の中から感じるものだったと思います。



**統合失調症を患う母とともに
生きる子ども(番外編)**
P239～

杉江 太郎

前のマガジんで、ハガキを送っていると書きました。この夏も、暑中見舞いを書こうと思い、郵便局にハガキを買いに行きました。そこで大きな壁にぶつかります。今年は、「かもめーる」(くじ付きのハガキ)が発行されず、別の夏用の絵入りハガキが発行されると聞いていたので買いに行ったのですが、なんとどの郵便局も売り切れ。今まではどの時期に行っても買えていただけに、少しムツとして職員の方に聞いてみると、そもそもの発行枚数が少なく、それぞれの郵便局にも少ない枚数しか届いていないとのことでした。とにかく、4カ所の郵便局を回って、手に入ったのが5枚。そして電話で市内の郵便局に順に電話をしたが、どの郵便局も売り切れでした。そして今、短信を書きながら調べてみると、2020年度は約1億4千万枚発行されていたのが、2021年度は1千万枚しか発行されていないとのこと。14分の1になってしまったのであれば、5枚だけの手に入ったのが奇跡のようである。ということで、今年は、5人には奇跡のハガキを使用し、それ以外の方には絵葉書に切手を貼って送らせてもらいました。今更ながら、奇跡のハガキ置いといたら、将来プレミア付いたかなあなんて考えてしまうあたりセコイ人間ですね。ちなみに、今知りませんが、スマホでハガキのQRコードを読むと、ジンベイザメがハガキの上を泳ぐようです。皆さま試してみてください。

「余地」-相談業務を楽しむ方法-
P234～

迫 共

保育者養成の傍ら、ひとり親支援と主権者教育をミッションとする一般社団法人1×1(ワンバイワン)の代表理事を務めています。静岡県内でコロナ禍により生活困窮に陥った方への食糧支援を実施してきました。

この7月に浜松市の「子どもの未来サポート事業(子どもの貧困対策の取り組み・フードパントリー事業)」の受託が決まり、市内3ヶ所で各回生活困窮100世帯に援助物資を届ける配布会を実施することになりました。

初回は学生・社会人ボランティアとともに食料品と生理用品を配布し、相談にも複数件、対応しました。スクールソーシャルワーカーや子育てNPO・男女共同参画団体からも見学があり、様々な方の協力で実施できていることを実感しました。

コロナ禍で業績を伸ばした企業も一方で、業界全体が危機に陥るケースもあります。ひとり親世帯をはじめ、非正規で働く人々への援助が求められている中、自治体の施策としてこのような取り組みができていくのは、注目されてよいと考えます。まだまだコロナの影響が見通せない中です。全国で同様の取り組みが進められることを期待しています。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ
P230～

浅田 英輔

コロナはもうだいぶ飽きた。「もうちょっと我慢、もうちょっと我慢」と言い続けてもう2年になろうとしている。飲み会と出張が大事だったんだなあと感じている。オンラインでやりとりすることが増えたが、だからこその出会いもある。コロナ前はオンラインで顔を合わせるなんてことはなかったのに、今は普通だ。普段接することのない人とも仲良くなれる。コロナなんてないほうがいいけど、せつかくだから機会を活かしていきたい。青森人のメリットは大きいのではないだろうか。

臨床のきれはし
P112～

三浦 恵子

前回連載後、短期間だが持病の悪化により入院した。食事制限などで体力が低下し、ヘルプマークの取得を決意した。私は杖を含めて複数の装具を使用して生活しているので、身体の不具合が目に見える状態であるので、特にヘルプマークの必要性は感じなかった。しかし、オリンピックの開始とともにターミナル駅の手も増えたことで、悪意なくぶつかることも増えた。杖歩行的私にとってこれは転倒などにつながりかねない。しかし実際に着用してみると、1週間で2回「邪魔」と通りすがりに吐き捨てられる経験をした。ある時はエレベーターを駆け降りる人からすれ違わずに、ある時は酒気を帯びた様子の男性から。こうしたことがあることは聞いていたが、さすがに心に突き刺さった。ヘルプマークをつけていることでかえって危険を感じられる場面もあり、今後どうするか考えている。

更生保護官署職員

(認定社会福祉士・認定精神保健福祉士)

現代社会を『関係性』という

観点から考える

P223～

黒田 長宏

東京オリンピック2020が2021年に開会式が始まる前日まではコロナ禍のせいで開催反対だった私だが、見事に考えを覆した。これは私としても苦渋の転向だった。無観客にしたのが正解だったろうが、掟破りの？札幌のマラソンの沿道の応援の皆さんがデルタ株の新薬開発モニターと化していたが(嘘)、テレビで観たほうが解説もあっていいのに。多分お隣千葉県出身の増田明美さんなんてコードぎりでやっているし(嘘)。だいたい、なんで東京オリンピックなのに北海道でやっているんだか(嘘)。北海道オリンピックが正解ではないか。まるで東京ディズニーランドだ。などと他の都道府県のことはどうでも良いのだが、茨城県の私の隣の自治体のやはり(といっても千葉県の自治体もあるのだから正確に書かないと先入観で間違えることもあろう。ただ利根川を渡る必要がある。)茨城県出身のスポーツライティング

の野口選手の引退試合での銅メダルでおめでとう。もし東京オリンピックが中止だったらこうしたことは無かったということだったのだ。そうだと私もこの世に存在しているのだった。そのアリバイは此処だ。いばらき～♪いばらき～♪われらがいばらき～♪。ぎじゃなくて「き」。

最後の韓国の選手には落ちろ落ちろと念じてしまい、まったく対人援助と逆の人間性を私は発揮していたが、韓国の選手はまだ17歳である。フランス大会で頑張っていたいただきたい。だから引退の野口選手が銅メダルで良かった良かった。後輩は何事もまずは先輩に譲るべきだろう。だが、きっと隣の自治体出身の人でなかったら、観ていなかったかも知れない。試合の翌日の茨城新聞のトップは3分の1の紙面を費やして野口選手の記事であった。だから茨城新聞は鹿島アントラーズの情報量は新聞業界1位のはずである。その量は茨城新聞を購読していない人達にとっては想像以上だろう。それに比べれば読売新聞の巨人の記事の量など無きに等しいくらいだと多分思う。今回は短信のほうを本文より頑張ってしまった。きっとオリンピックの影響だ。

<https://konnankyuuujotai.jimdofree.com/>

ああ結婚

P205～

尾上明代

6月から親の介護が、急に変な状況になりました。夜勤のヘルパー、在宅医療の医師・看護師、ケアマネの皆さんのサポートにより、最悪の状況から脱することができたのはとても感謝していますが、まだ大変さは続いています。

加えて、4日間の夏の集中授業(ソシオドラマ)を対面で20人以上の院生と無事に終えるというミッションもあり、それらが重なって、今回の投稿は残念ながらお休みさせていただきます。

わくら葉を指にひろへり長やまひ

(草城)

ドラマセラピーの実践・手法・研究
休載

松村奈奈子

コロナコロナな毎日。通勤で京都市内を歩いていると、いくつものホテルを目にします。ふと見るとホテル名が以前と変わっていて「あれっ、オーナーが変わったのか」と驚く事がこの1年で何回もありました。飲食店も突然「テナント募集」の看板がでて「ああ、このお店も閉店したのか」と驚く事も多くなりました。

そして我が家の行きつけ中華料理店もとうとう閉店となり、半年ほど毎週テイクアウトした「焼き豚」はもう食べれなくなっちゃいました。店長の「応援してくれたのに、ごめんなさい」の最後の言葉は、いろんな意味でこたえました。

精神科医の思うこと

P172～

柳 たかを

前号(第45号)の短信では、1980年にアメリカジョージア州に何者かが建てた6枚の石板による不気味なモニュメント(ガイドストーン)に触れた。そのモニュメントの一番トップに刻まれた「世界人口を5億人以下に維持する…」というメッセージを紹介し、そんな大それた計画があり得るとは信じられないと綴った。



幼い頃からの手塚漫画ファンだが、手塚作品に印象に残るSF短編がある。東京のような近未来都市が舞台で、人々はギューギュー詰めの通勤電車で押し合いへし合いしながら日常生活を送っている。主人公の周りの人たちは芋の子を洗うような日常にウンザリしながらも平凡な生活に疑いを持たず食べたり飲んだりしている。

主人公だけは日常にささやかな違和感を感じ、それがだんだん大きく膨らんでいき、やがて違和感の理由を追求せずにはいられなくなる。

そして禁じられているが、密かに都市上空を飛行し続けてとうとう都市の周縁部に到達する。境界を越えたとたん、先には緑も生命もない月面のような切り立った暗黒

の死の荒地が延々と、、、人々が暮らしている都市は言わば羊の放牧場のような困われた檻だった。誰が何の目的で作ったのか？

読後・・・少年の私は今生きているこの世界も、実は同じようなものかもしれないと一瞬冷水を浴びせられたように感じた。今、その存在が証明(同定)されていないと囁かれるウィルス感染を恐れ、世界中でワクチン接種が進められている。連日テレビ報道はこの話題ばかり。すでに日本人のほぼ半数が1回目の接種を終えたと聞く。「ワクチン打ったから、これで安心して旅行に行けるね」って・・・本当にそうのですか？正直言ってとてもじゃないが樂觀できないと思えて仕方がない。

あのガイドストーンの言葉が繰り返し耳の奥で鳴り響くのです。

東成区の昭和 思い出ほろほろメモ P177～

小林茂

新型コロナウイルスに対するワクチン接種を受けてきた。私が勤める先の一つの幼稚園の先生方は、50代以下の方の皆さんはひどく副反応が生じた。一番若い先生は、熱が40度まで上がり、他の先生は発熱、節々の痛み、悪寒など副反応の症状がさまざまであった。私など50代前後の者は、副反応がなかったわけではないが、そこまでひどくなかった。

さて、知り合いの看護師に、なぜ年代で副反応の違いが出るのか尋ねてみたところ、年齢が上がると免疫機能が低下するためだ、ということであった。その場では、「ああ、年齢が上がると身体のさまざまな機能が低下するからな」と納得したのだが、しかしよくよく考えてみると、ワクチン接種＝異物が体に侵入するという出来事に免疫機能が低下した身体が抵抗できずに症状にやられてしまうのではないかと思わされた。したがって、年齢が高い方に副反応が出やすいという理屈にならないだろうか。しかし、正しくは、ワクチン接種＝異物が体に侵入するという出来事に免疫機能が抵抗してやっつけようとするから発熱したりする副反応が起こるといふ理屈が正しいようだ。

副反応はつらい。しかし、こうなってくると

免疫力や抵抗力があるということや、予防のためのワクチン接種の善し悪しを思われる。

わかったことは、自分の免疫機能が年齢相応に低下していて、ワクチン接種による予防とあいまって、自分の身体の主に苦痛をあまり与えることなく、平和に共存しているということだ。とりあえず、良ししようと思うこの頃である。

対人支援 点描 P167～

藤 信子

月に1-2回坂出に出かけるので、帰りに岡山で乗り換える時に、駅中の「おみやげ街道」で、岡山や香川県のお土産を見ている。岡山の果物を使ったタルトが美味しかったので、次も買おうと思って探すのだけれど、なかなか見つからない。散々うろろしてやっと見つけた。どうしてこんなに見つけないのかと考えると、どうもいろんな商品のパッケージがすごく明るくにぎやかなのだ。岡山のお土産は果物を使ったものが多く、明るい色彩だし、瀬戸内のお土産はレモンとかまたこれも明るい。皆が明るい黄色、赤、ピンク等々を多く使用してあるので、見分けがつかなくなっているのだ(私だけとは思えない)。これは商品売るときには、不利ではないだろうかと思った。お土産品協会(そんなものがあるかどうかは知らないが)かどこかが、お互い見分けやすくするために、パッケージに関して相談したら良いのにと、大変余計なことを考えている。

対人援助学との出会い(1) P47～

団遊

基本的には家にこもる毎日を過ごしているが、子どもたちの夏休み、何も無いのも残念だなあと思い、キャンピングカーで北海道を旅してきた。3泊4日のショートリップ、リスクがあるのは、ほぼ羽田空港だけだろうと踏んだ。

その初日、まずは父の「やりたいこと」として、帯広のばんえい競馬場に行った。ご存じの方も多いと思うが、1,000キロほど大型馬(JRAのサラブレッドは500キロくらい)が、騎手を乗せた「鉄そり」をひいて、全長200メートル、2回坂を越えるコース

を走る。コースはそれしかないで、未勝利の馬も、グレードレースも、同じコースで行われる。



ポイントは、坂をひと息で超えられるかどうかにかんがう。坂の手前で息を整えて、騎手の合図で登坂する。「ああダメだ!と馬が諦めて途中で止まってしまうと、馬券に絡むことはほぼない。だから2回の坂越えと、あとは最後の50メートルほどの直線が見せ場だ。

実際に足を運んでみると、馬と一緒にスタートから200メートル走るのが、予想以上に楽しかった。期待する馬を横目に、ゲートが開いたら一緒に走る。走るスピードは全然速くないので、こちらの息が切れることはない。坂の手前で馬が呼吸を整えるときは、一緒に呼吸を整える。「さあ行け!」と念じて、また一緒に走る。やがて2回の坂を超え最後の直線に。明らかにバテてしまい、馬が「もう勘弁してくれ」みたいな顔をしていることもある。そうすると、後ろから来る馬にどンドン抜かれてしまう。

馬券が当たるか当たらないか、ぎりぎりの勝負の時など、最後の直線は文字通り大興奮だ。何と言っても、スピードが人間よりも遅いから、「ほれ!ほれ!」とこっちが代わりに走ってやりたくなるくらい応援に熱が入る。この醍醐味は、時速60キロとも言われるJRAでは味わえない。そして、たとえ期待馬が負けたとしても、「一緒に頑張ったよな」「よく走った、仕方ないよ」的な感情移入が起こる。こちら200メートル走ったのだから、仲間みたくな気持ちが湧くのだろう。

行く前は「一度くらい経験に」と思っていたが、すぐにでもまた行きたいお気に入りスポットになった。ちなみに、密になるのが難しいくらい、空いています。ばんえい競馬、私が書いた楽しみ方も含めて、おススメです。

人を育てる会社の社長が、 今考えていること P31～

村本邦子

2021年8月、疾風怒濤の夏だった。8月1日、車で満蒙開拓平和資料館を訪れ、軽井沢で還暦の誕生日を迎え、翌日は無言館に行って帰ってきた。4日、二度目のワクチン接種、副反応のなか5日、実家に帰った。介護の問題があつて、両親は、実家から高速で1時間かかるところに暮らしていた。父が退院している予定だったので、2週間の待期期間を経て両親と会うつもりだった。結局、そのまま容体は悪化、2週間に少し足りなかったが、PCR検査を条件に面会が許可され、その日の夜に父は亡くなった。そして、このPCR検査の結果を待つ間に、大雨の中で夫が転倒し、救急搬送されて入院となった。きょうだいは皆ばらばらに遠く離れて暮らすため、お通夜、お葬式、納骨までをいっぺんにすませた。コロナの影響で、妹や弟は面会できず、可哀そうだった。私はと言えば、まるで父が計算しつくしてくれたかのように、仕事に穴をあけることもなく、予定通りの便で大阪に戻ってきたが、夫を残してである。安静第一だし、コロナもあるので、それが一番よかろうと判断した。早く回復してくれることを祈るばかりである。還暦とは生まれた時に戻る時らしいが、なんだかまだ、あの世とこの世の狭間をさまよっているような気分だ。

**周辺からの記憶 一東日本大震災
家族応援プロジェクト**
P130~

國友万裕

この春からキリスト教の教会に通っています。

先日、初めて聖餐式を受けました。と言ってもコロナ禍なので、葡萄酒の代わりに葡萄ジュース。パンの代わりにウエハース。しかし、これを受けたことで一つ通過したという気持ちにはなりました。この後、クリスマス頃に洗礼を受ける予定です。

歳のことばかり言っていますが、もう57歳と半年。還暦が目の前です。と言っても、自分ではそういう自覚がありません。昔の還暦と今の還暦とは全然違うから仕方がないのだろうけど、生と死の問題が大きいのしかかってくる歳になってきたのに、僕はまだ学生の時のような悩みを

引きずっています。

キリスト教を勉強し始めたのも、そういう迷いを振り切るためです。

連載の中でも書きましたが、キリスト教も本格的に勉強し始めたことですし、これからは過去のことは忘れることを考えます。過去に想いを巡らせるのではなく、未来を逡巡して生きていこうと思っています。

次回からは「男は痛い！」未来編です。(笑)

**男は痛い！
P100~**

古川秀明

「拈華微笑」

老人ホームに入居している母と、定期的に面会している。コロナが流行しているので直接ではなく、リモート面会となる。その時の会話。



母「こないだ施設の職員さんとお互いにグウでタッチしましてな、その時に職員さんが、『仲間！』て言われましたんや。あてはこの年になって、初めて仲間という言葉の意味がわかりましたんや」

私「へえ、『仲間』てどういう意味なん？」

母「…」

私「意味が分かったんやろ？教えて」

母「そやから仲間は仲間でおます」

私「はあ？言葉で言うてえや」

母「う〜ん、言葉では言えまへんなあ。とにかく職員さんとグウでタッチした時に仲間が分かったんでおます」

言葉を越えた感覚があることを、そしてそれはとても大切なことであることを母から教わった気がする。

講演会&ライブな日々
P119~

西川友理

保育者・社会福祉士など福祉系専門職養成に携わっている教員です。

これを書いているのは8月23日、処暑です。…処暑！いかに、今年すいかを食べずに夏が終わってしまうではないかと、慌ててすいかをひと玉…は多いな、と思いなおし、適当な切り身(切り身?)を購入して冷蔵庫に入るサイズに切りながらつまみ食い…のつもりがあまりの美味しさに貪るように堪能。ふう、と一息ついて、あれ、何で今年すいか食べなかったんだっけと考え、気付きました。すいかって「皆でわいわい分け合うもの」だから、です。子どものいるところや、居場所と言われるところに出かける事も出来なかったのですから、我ながら納得です。こんなところにもコロナの影響があるのか、と驚きました。気づかないところで、気づかない出来事が、いろいろと関係して起こっていますね。キャンプ用品が売れたり、デリバリーやテイクアウトが充実したり、というわかりやすいところ以外にも、いろんな動きがあるのだろうなと思います。

**福祉系対人援助職養成の
現場から**
p86~

坂口伊都

仕事で出会った方が新型コロナの陽性者とわかったと連絡が入りました。マスクをしていたこと、パーテーションがあったことで濃厚接触者にはあたらないが、念のためにPCR検査を受けてもらう。居住地の保健所に連絡をいれるので、名前、住所、電話番号、生年月日を教えて欲しいと言われ、大人しく家で最寄りの保健所からの電話を待っていましたが、待てど暮らせどかかってきません。最寄りの保健所に電話をすると、何と「坂口さんのお名前はリストにありません。濃厚接触者でなければ、普通に生活してもらって構いません」と言われました。「えっ？、何ですって？」

仕事に行っていた所の保健所にこう言われたのですがと電話をすると、「こちらからは確かに書類を送っているので、最寄りの保健所からの連絡を待ってください。最寄りの保健所の指示に従ってください」とのこと。悲しい板挟み。迷子の迷子の坂口さん。そして、かかってこないだろうなあとの予感通り電話は入らず陽性になった方とお会いして、2週間が経ちました。念のため、自分で抗原検査をして陰性を確

認して活動を再開しました。保健所同士の連携に余裕がないこと、保健所の地域差を痛感した巣籠期間でした。

家族と家族幻想
P125～

河岸由里子

【人生】

胆振東部地震の支援を行っているが、多くの方が立ち直っていく中で、中々不安感がぬぐえず、おびえも取れない方や、震災の問題ではないがいつまでもうつ症状を出している方がいる。そういう方と面談していると、壮絶な過去の話に触れる。表面的な情報だけでは想像もつかないような、悲惨な人生を生き抜いてきた。人生山あり谷ありというが、その谷の深さに驚かされる。良く這い上がり、ここまで来たのだと感心する。そして、こうした過去のことを誰にも吐き出せずに、一人で抱え、飲み込んだ来たことの辛さ、強さに思いを馳せ、二人で共有する。思いっきり泣くなどということはない。ほんの少し、涙ぐみながら、ゆっくりと過去をバラバラに語りだす。ごちゃごちゃな話がしばらく続くが、何回か面談を繰り返すうちに、1つのストーリーとしてまとまっていき、やっと今、現在の話になっていく。長い長い話が終わった時、その方たちの表情は晴れやかで、穏やかになる。最初は身なりも構わなかったような女性が、最後は綺麗にお化粧もして、服装も素敵になっていく。こんな変化を目の当たりにできる私はなんて幸せなのかとしみじみ思う。

公認心理師・臨床心理士・北海道
かうんせりんぐるむ かかし 主宰

ああ、相談業務
P93～

先人の知恵から
P196～

岡崎正明

「正常性バイアス」という言葉がある。

ニュースなど、災害や危機管理の話の際に最近よく耳にするが、ようはヒトは災害の危険など、通常の判断が及ばないような事態に直面すると、「そうはいつでもこれまで大丈夫だったのだから」「ほかの人も逃げていないから」などと事態を過小評価する心性にハマりやすいので、気をつ

けなければならない…。そんな意味だと理解している。

そういう心の動きはなんとなく理解できるし、注意が必要なのも納得だ。事前にそういうクセを知っておくことは、とても有用だとも思う。ただ 100 歩譲ってその危険性には十分気を付けつつも、なんだか「正常性バイアス」自体がいけないもの、悪い事みたいワードになるのは、ちょっと違うのではないかと思っている。

そもそもそれはヒトが自らの心理的不安定感に対処するための術で、それで不安状況を乗り越えた場面も多分にあるのではないか。人類の役に立ってきたからこそ、今も我々はその能力を維持している。そういう解釈もできるような。

みんなが「危険だ！」「危ない！」とヒートアップする雰囲気の中で、「でもちょっと待てよ」「こういう見方もできるんじゃないか？」と冷静に、少し事態を客観視して空気の読めない発言をする。そういうことを封殺しない社会であることは、とても大事な気がしている（まあそういうのは厳密には正常性バイアスとは言わないのかもだけど（笑）。

役場の対人援助論
P107～

大谷多加志

新しい職場に移って 5 カ月。まだまだ慣れない仕事ばかりで、抜け落ちがないように仕事を進めていくのに結構な労力と精神力と時間を使っている状態ですが、それでもなんとか前期授業を終えることができました。少し時間に余裕ができたので、これまでやりたいと思ってやれていなかったことに着手しようと、現場の仕事に取り組んだり、滞っていた調査を進めたりしています。

また、前号の執筆者訪問記で「猫から目線。」の小池さんの活動を見せて頂いたことをきっかけに、我が家でも保護猫の一時預かりにトライすることになりました。動物の飼育経験自体がない我が家でしたが、保護猫が来てくれたことが、家族にとってもよい方向の変化を生んでくれたように思います。さまざまな形での出会いにつながりに、ただただ感謝です。

発達検査と対人援助学
P115～

馬渡徳子

私は、子どもの頃から、断ることが苦手だ。

大学院に入学後、留学生と過ごす時間が増えて、一層そのことを自己覚知した。彼らは、個性もあるが、「NO」とはっきりと表明することの大切さを子どもの頃から親や教師より学んできたという。

彼らとのやりとりで、妙に希望を持たせたり、曖昧な態度を取らないで、堂々と「NO」と言ってもらえる清々しさを体験することができた。



なので、コロナ禍にて、それを理由に「断ることの練習」ができた気がする。

今回の本文は、番外編に相当する。コロナ禍川柳を創作してみたので、ご笑読下さると幸いです。

馬渡の眼
P175～

団士郎

妻が亡くなって一年。作法にそう関心もないので、一周忌は来ていただく方や私の都合を調整して、一ヶ月遅れの九月にすることにした。（それでもコロナ禍がどうなっているか、不確定要素ありだが）。

だから8月は妻と二人だけの初盆だった。一年経ったので遺影を新しいモノにしたり、祭壇の様子を変化させた。忘れずお花を下さった方もあった。

豪雨も重なって、外出を控えたお盆期間、静かに過ごしていたら、未明の夢に妻は二日連続で登場した。

実にありきたりな、いつものままの様子で、「以前といっしょやないか！」と突っ込んで目覚めた。面白いなあ、夢がどんな仕組みになっているのか心理学的解釈に興味はないが、その存在は有り難い。

*

「Family history」は前回で一区切り。

今回からしばらく、
配偶者を亡くして一年日記(1)
P58~

鶴谷 圭一

隣接する保育園でコロナ陽性が発生してから、ほぼすべての仕事時間がコロナ対応で費やされている。行政から送られてくる「ガイドライン」もかなりのページ数だし、それを読むだけでも時間がかかる。(これを書いている間にも3通事務連絡が着信)

それを元に保護者に分かりやすく園の方針を伝えるのがなかなか骨の折れる作業だ。保護者の受け取り方も様々なので、言葉一つ一つがわかりやすいか、どう解釈されるか、抜けないか…何度も職員数名で読んで、手直しを繰り返してやっと発出できる。コロナ関連の文書はそれだけデリケートな案件ということだ。

緊急連絡で、最初のメールを流し、翌日の登園児はグッと減ったが、感染のリスクは少ない…と翌日メールしたらグッと増えた。こちらから発信する情報の重さを実感した出来事だった。2 学期が始まったら子どもたちの明るい話題をどんどん発信できるようにしたい。

原町幼稚園 <http://www.haramachi-ki.jp>

メール office@haramachi-ki.jp

インスタ haramachi.k

ツイッター haramachikinder

幼稚園の現場から

P81~

水野スウ

マガジン第2号から前回45号まで、連載の皆勤賞を誇って(笑)いた私ですが、今号はお休みして、短信でだけ参加させてもらいます。

8月初め、歯茎が痛み出したと思ったら、あっという間に全身不調のデパートに。まとまった文を書こうとすると頭が痛くなるので、じたばた抗うのはやめて、夏休み宣言しました。最初は、単なる歯肉炎でこまでなるか？って不思議だったけど、思えばちゃんと理由があった。この7月、コロナ下にもかかわらず県外へのおはなし出前が相次ぎ、猛暑の中、東へ西へ。抵抗力、きつとガタ落ちしてたんでしょ、ひと月分

貯まった疲れが時差を経て、私の弱いところに正直に出たってことでした。

今の私が伝えたいことを生で話せる機会はおとしから比べるとぐんと少ないものだから、その分つい、出前の一回ごとにリキがはいっちゃう。帰ってきたら即、ふりかえりまとめ報告をFBやブログにアップしたいし、この時期、覚悟をもって企画主催してくれた人にも、エイヤ！と参加してくれた人たちにも、できるだけ早くいねいにお礼が言いたい。そのもろもろが間をおかずにできた時の私の達成感ハンパなく、脳がおおいに喜びます。

ただこれが曲者で、危険なものでした。それってずっと交感神経出っぱなしで、心身ちっとも休んでないということ。朝ドラの「モネ」で菅波ドクターがいったせりふ、「あなたのおかげで救われました、という言葉は麻薬です」というのと、意味は同じじゃないけど、脳が喜ぶ、麻薬、という点ですこし重なる。他者にいねいにしたい時でも、自分のキャパを無視してまでしちゃったら、それは自分を粗末にすること、本末転倒。それに加えて私、なまじ日ごろから元気なだけに、自分の年齢を足し算すること、ここ数年すっかり忘れてたんです！

歯肉炎クーデターが起きてから、かかりつけの鍼灸師さんのもとに通い、ぼんぼんに腫れたアゴを針山(正しくは鍼山)にしてもらって、お腹にお灸もすえてもらって、夜眠れるようになり、深呼吸できるようになり、一枚一枚、玉ねぎの皮(オブラート)みたいな、すけすけの薄ーい皮も含む)をむくように戻ってきた私のからだ。お帰り、と声をかけつつ、自分に言い聞かせた。今できることであっても、今なくていいことがあるんだよ。ちょっと無理したり、がんばればできることは、今はしないことにするんだよ。喉が乾いてから水分とるんじゃ遅いように、ふう～疲れた、頭パンパン！って感じてから休むんじゃ遅いんだよ。そんなふうになんていながら過ぎて、8月の終わりにやっとこ、私、白いまん丸玉ねぎになれました。

年を重ねて、これまでの私のからだに記憶・記録されている過去年表と今の状態を、これからはもっと耳を澄まして聴くことにしよう。ほんとに好きなこと、したいこと、するべきことを、吟味しながら、私自身に誠実に。



暑さもコロナもまだまだ続きそうです。どなたもどうぞ自愛ください、このウイルスのもたらす数値化できない緊張は、おそらく誰の心身も痛めつけているはずだと思うので。

きもちは言葉をさがしている 休載

見野 大介

お盆も明けて少し暑さもマシになってきました。秋冬の展示会と、注文の山との戦いも本格的になってきました。…休みが欲しい今日この頃(笑)

ハチドリ器 P4

脇野 千恵

地域で始めた活動、「まちの保健室『ちむちむ』」は、少しずつではあるが知名度が上がってきた。何より2年前に草津市まちづくり事業団の助成制度に採択されたことが大きい。

公的な機関のお墨付きをもらうことは、色々な意味で信用が得られる。市の広報欄には、「性の悩み相談」窓口として掲載してもらえた。性のアドバイザーとして研修の依頼は、最近学校以外の人権、男女共同参画、障がい者関係などの機関に広がってきた。

「性と生」のテーマが、少しずつではあるが社会で語られるようになってきたからか。それは喜ばしいことだが、肝心の教育という現場で国際社会が提言している「包括的セクシュアリティ」の実践がなされていないのは、本当に残念だ。

昨今「生理の貧困」などメディアで取り上げられているが、学校での性教育実践にはなかなか結びつかない。学校では教えてくれない「性と生」の情報を、一人でも多くの子どもや若者たちに伝える活動をま

だまだ頑張るしかないのか。

こころ日記「ぼちぼち」part II P251～

中村正

母親の介護のことをひきつづき。認知症が進んだので特別養護老人ホームへの入居申込みをしていた。介護保険の法律はよく変わるが特養は介護 4 と 5 の人を優先する。三ヶ月程の待機で地元のホームに入居ができた。9 月の初め頃には今の施設からひっこしとなった。しかしコロナ対策で面会できない。地元の間人もだめだという。ひっこしも家族は手伝えない。すべて施設同士が担当するという。家族は単に契約にいくだけだ。面会はオンラインだ。他府県の私はオンラインで対話することとなる。果たしてうまくいくか。男性問題研究からするとやはりユニークな体験をしていることになる。たとえばこの歳になって息子という立場が躍り出ることだ。ケアマネジャーをはじめとして息子さんといわれる。息子介護は、夫介護とならんで男性介護問題としてホットなテーマだ。三重県の伊勢志摩にある実家に帰る機会が多くなる。そこでは親族や近所の人たちも同じく私を息子としてみる。あたりまえだが京都にいとそんな立場は前にでてこない。なんだか子ども時代に戻ったみたいだ。やはり地元では息子だ。伊勢志摩は海の幸が豊かで食べ物がかたく安くて旨い。しかしそれを手料理で振る舞ってくれた母と食卓を囲むことができない。一時帰宅も許可されないからだ。唯一この点が同じ息子でも以前とは異なる。寂しい感じがする息子だ。

臨床社会学の方法 P21～

千葉晃央

コロナ禍で実家のある秋田に帰ることがなかったので、育ちの故郷に向かった。私は「ALWAYS 三丁目の夕日」「ナミヤ雑貨店の奇蹟」「おっぴいバレー」など、昔の街並みが描かれている映画が好き。自分が生まれていない時代であっても、やはりその近い時代に育ったので、親しく感じるのだろう。育ちの故郷「豊中」。当時は自転車、北摂から心斎橋まで友人たちと走りまわった。この道にはこんな店があり、

奥には神社があるなど分からないことがないぐらいだった。久々に、最寄り駅周辺を歩いた。新しい建物があるがとところ、以前の家があり「懐かしい！」とみる。しかし廃屋になっている。「ここは蕎麦屋さん！」と思うとすでに閉店。「ここはカメラ屋さん！」と思うと、もうそこは建物が崩れかけている。「ここは田中くんの家」と思うとそこもすでに草がぼうぼうになっていた…。歩くと自然と奥底に眠っていた記憶が呼び覚まされて、友人の顔や、その店の往時の様子が思い浮かぶ。怪談・奇談のジャンルには「路地の奥の店に行くと古い昔の店に入ってしまった…」というような話がある。そんな話すらまんざら遠いとは思えない経験だった。それぐらい年を取ったのだ。…ここであつたお祭り、行きつけのミスド…。友人家族がやっていたお店…。パンクなおした自転車屋…。ついこないだのように感じるがウン十年前。



父母が秋田を訪れて、「昔はここはこうだったのよ」と話してくれた気持ちが以前より分かってきた。そのとき、父母の心の中にも友人や先生や登場し、その時の感情も湧きあがり、ついこないだのように感じていたのだろう。「鏡を見て、老けた自分にびっくりする」とよく周囲の年長者が話していた。つまり精神は変わっていない部分も残しながら生きる。もしかすると成長は一方ではなし、単層ではないのかもれない。自分も、その時にいる周りのメンバーによって、どういふ自分を降霊するのも変わるような気がしなくもない。絶対的な自分はあるようでない。あの時の自分も、今もそこ、ここにいるような気分になる…こんなことも悪くない体験だった。私には「豊中」はそういうことを喚起する場所になったことを知った。他にはない場所だ。時々鏡の中の自分をみて、自分のふるまいを調整する。この外観で行動しているこ

とを定期的にインプットして、今日も自分の制御を行い稼働する。

家族支援と対人援助 **ちばっち**

chibachi@f2.dion.ne.jp

090-9277-5049

障害者福祉援助論

P17～

サトウタツヤ

ワクチン接種2回目を終了(於立命館大学)。2回目を打ってくれた看護師さん、非常に上手で本当に痛みを感じなかった。人生で最も痛くない注射だったと言っても過言ではなく、名前を聞いておいて常にお世話になりたいと思ったとか思わないとか。。。その後12時間後に悪寒あり(それまでは普通)、解熱剤を飲むものの、その後37度台の発熱があり、24時間は安静が必要、という感じでした(個人の記録)。ワクチンの効果は永続ではないので、治療薬の開発が待たれます。

対人援助学&心理学の縦横無尽

P97～

鶴野祐介

高齢者施設に暮らす母と、週1回ズームで対面しています。耳が遠くなった母と、手話を使って会話する絶好の機会です。

うたとかたりの対人援助学

P201～

山下桂永子

一昨日コロナワクチンの2回目を打って副反応の発熱中です。1回目も熱は出たので、念のため2回目は二日間仕事の休みを取ってはいたものの、前回よりも高熱が出てしまい、体中が痛いので、今は腰に湿布を貼って、おでこに冷却シートを貼ってこれを書いています。子どものころは平気だったのに大人になると38℃超えるとならんだなと思い出しました。

そういえば子どものころから、「今この瞬間に生まれた子どもや死んだ人は世界中に何人いるんだろう」とか「今この瞬間に私と同じようにひざ小僧にかさぶたができる人は世界中でどれぐらいいるんだろう」とか一人で想像するのが好きでした。そんな私は今も「今コロナワクチンを打って熱

が出ている人は世界中でどれぐらいいるんだらう」とか考えています。今世界中で、生き抜くために腕に遺伝子情報を打ち込んで、体の中でウィルスと戦う抗体を作っている人たちがいるのだなあと思っています。内容とは全く関係がないのですが読んでいただければ幸いです。

心理コーディネーターになるために
P185～

篠原ユキオ



もう自宅の固定電話回線を解約してから2年以上になる。電話は携帯で済むほとんどの連絡はメールで済む。迷惑なセールス電話や詐欺電話も全く心配無い。Wi-Fi はもう20年以上前からポケット Wi-Fi を使っていて自宅には回線を引いていない。外出時にはいつもそれを持ち歩くからどこにいてもネット環境は万全である。ところがこのポケット Wi-Fi が時折繋がらなくなる。原因を電話会社に確認してもわからない。そしてこの原因不明の障害は自宅の仕事部屋だけで起こる。だから繋がらなくなったら仕事道具をまとめて別の部屋に移る。多分その部屋だけの電波状況の変化によるものだと思うのだが、コレが起こるとそれなりにストレスがあるのだ。しかし最近はずぐに仏間に移動することになっている。先日もお盆の入りから明けまで繋がらない日が続いた。ここに入った途端にすぐ繋がるから不思議である。もしかすると仏壇から「こっちの部屋にしばらくいたら？」と呼ばれているのかと思うようになったらめんどくさは消えた。

HITOKOMART
p274～

中島弘美

この夏、大阪の最高気温が 38.9 度を記

録した日があった。とても暑かった！その日も含めて一週間、家族支援に関する集中講義を担当した。将来、保育所や児童福祉施設などで働くことを希望する学生さんが対象だ。講義は、感染予防に十分配慮しながら、面接の練習などのワークを取り入れた。

学生さん達は、すでに、子どもの理解そして子どもと養育者との関係の大切さを学んでいる様子だった。一方、家族という切り口になるとまるで思考が停止したように、はてな？の状態になった。どんな家族？この家族の強みは？弱みは？今後何が必要？家族理解や家族全体を視野にした支援となるとこれまで触れたことがない様子だった。

「子どもと家族理解支援については、これから確実に伝えていく必要があるなあ」と、改めて、感じた夏だった。

カウンセリングのお作法
P41～

竹中 尚文

不本意ながら今回は「路上生活者の個人史」を休むことにした。前回に書いたように、私たちは大阪の扇町公園でホームレスの人たちに食糧支援をしている。それをご縁として、私はホームレスの人の話を聞くようになった。食料配布の後、個人的な話を聞かせてもらうのである。コロナ禍により密を避けねばならないというので、インタビューの密接を考慮してきた。ホームレスの人たちは感染しているかもしれないと思っても、積極的な受診をできそうにない。特に感染者の多いときは心配だった。そんな中、先週に他のボランティアグループの食料配布で、配布者がコロナに感染していたと連絡があった。私たちにも予想された事態だった。日本の現状は、どこで誰が感染していても不思議ではない。ホームレスの何人かに濃厚接触が心配された。私たちの食料配布ではホームレスの人たちが行列をつくる。ホームレスの誰かが感染していると、この行列で感染が広がるおそれがある。今回はいなり寿司の配布のみにして、衣類や日用品の配布は中止にした。いつもの時間より早めに配布を始め、いなり寿司を受け取りに来ると直ぐに立ち去ってもらって、行列をなくした。

こうして感染の可能性を減らしたのだが、インタビューの機会はなくなった。◆インタビューは話を聞かせてくれそうな人に来月の食料配布の後であなたの話を聞かせてもらえないかをお願いします。次の月の食料配布の後、その人のお話を聞かせてもらう。録音を元にその話を文章にする。最初から数えて二ヶ月後の食料配布の後、その文章を読んでもらって話が違っている所を指摘してもらいながら、疑問点を質問する。三ヶ月後に修正した文章を確認してもらう。もう確認の必要はないという人もいる。もう文章にすることに興味がなく、自分の人生に関心を持つ人がいることの方が重要になったようだ。◆ホームレスの人たちにインタビューをしようと思ったのは、去年の冬の終わりだった。日本でコロナ禍が始まった頃である。その頃、コロナ感染で亡くなるホームレスの人はいなかった。冷え込んだ夜が明けた頃、凍死している人が発見されることがあった。悲しいことだが、ホームレスの人の凍死は毎年あるそうだ。「セッタ」もその一人だった。彼がいなり寿司の配布に並ばなくなって、私は「セッタ」の本名も知らないし、どんな人生を送ってきたのかも知らないことに気づいた。人の命は夜露のように消えてしまうものであるかもしれないが、その命が誰の記憶にも残らないのはあまりにも悲しい。そんな思いでこの一年半ほどの間、ホームレスの人たちの人生を聞いてきた。先週の食料配布の時に横田氏(仮名)は来なかった。彼とはコロナ禍でうまく会えなかったりして、インタビューに数ヶ月かかった。修正を終えた文章を横田氏に了解を取ったかったが、会えなかった。そんなわけで、今回は「路上生活者の個人史」を休むことになった。

路上生活者の個人史
休載

寺田 弘志

橋本和恵さんという、カリスマ販売員さんを紹介する番組をみました。橋本さんは、かつてアレルギーでアナフィラキシーショックを起こし、皮膚がただれて半年間入院生活をし、死にたい死にたいと思っていた時期があったといいます。周りの人に、戻ってきてね、死なないでねと声をかけられて、自殺を思いとどまったそうです。

